俳家奇人談 下

313-23
313
23
外箱あり
始

おほよそ古人の句にて苦楽趣をあらひてそのたくひ哉
何つ絶すてあそびなく實り古人於友とせんと
いふべし　無心集撰集抄隠逸傳なとみなその道あり
往年蕉語子三熊海棠氏あつまて閑田蒿父於
筆故畸人傳の編をあらはして大ゐ
其は物する俳家にもまたそれ人なかりしをと
玄之一といふ人ひとゝ外その例にならひて俳家於
奇行あるもの文明よりこのかた八十餘人をあつめて
ほとに坐右の友となす此人眠を失ひて見る

帝國圖書館藏

るすくなしといへどもよく古人成志に謐
くからずしてその撰に及ぶ尋常明眼の人にハ
心識もるかにまた是を以かゑしや古人成
よく志るゝ可し人ならんか難きにへてかの色をも
香をも乃梅のあかきなる庵しきおの子書て予校正
上木して並に披露すまさし人ならのあるにす
はつくかの耆萱れ志たふとむべし行人にさ侍に
語成さへよと氷黒主人よりやおくらるる世に風雅
をとなふものなみ見るにおなくも所摩を

このさ論て勝敗にのこるいとてまゐ家の編集なるまを
なかれさ三子はるりに流俗なり出てきらかく成
風流なはく支俳家にわれてまさきありとゑふへし
ゐきゝ諸て是をよみ上件乃人しれうへにまさなる
其の三子乃畸人をはなりとゐふへく於保由

丙子春

東都俳士

不隨齋成美跋

成美

豊久繊録

玄玄居士畧傳　　男 重重 述

先人竹内玄玄一は攝陽高槻に生浪華に成童して痾ぐ明誠夫に附て同国加古川に名高き人の俳諧へ導かれて招まふ於ては勤ら逝しが雲身靈花吹色を見る事の得ざいはば何を思ふとも甲斐なかりんと答へし我左右思ひを尚書にいちはや唯心獨守心眼の明かりんまを掲げ友のみ昔代が發する所なりぬ流居しとて一句ますがみる多かり朋の色と喩たりし句に感激なりより「思めす流る風に發るべく然附し重旅ふ一千里をへ歩より起るといへば掛たるんは京に言使変に斑らばさめやいと直さに言つまのくる「秋膳やあれ擁に成り初る高里と一句我吟しより陸くに數字の紙筆を費せ里於ケ

流水重蘙と交遊して道を討論するおと他事なし一世
高里を出て諸国を経歴するは遠ありて隠に亡て桜寂の
間なる濫洞をあけさして十許年去りて武の江戸なる東里深川
一居を卜し嘗て河東居山に嗣く俳事を談ずるゝ事
茲ゝ一年あまり又存義買明桜川鶯口か徒と教勧して
集会す明和中宮句当に進み京橋の西瀬治衛に移る
居を宥ありし号といひ又竹窓と號す「吃魚もあらつかぬ老
渇まりけり「腥小屋」へ邑沽学の河洽や武牡丹一国は水の水よ
成けり秋茄園年月を春はたんとを一宵は中で去や五漉
三河より三病後去に逝く「人ばかり死ぬとおもし落は
去すと「孫の顔見らるゝ許さん秋茄子といへるに端出して
いはく世に嗜ふ秋茄子覚の汁よ構ませても嫁よとも嫁

313-23

に喰すなと無姑は婉を悪での事とんおもらん里有にありけれ
生宣縄よ茄子は生実を利すして女おのを含すまじ子宮を
損ずる事妙に覚ゆる気を動し中を冷をは故る時は家継子
は生せざらんすると歎ての諺なりと或人その俳諧よ滞する
を嘲る者有里解て曰く杜氏よ俳諧度言にてる辞あり道
霊沢俳諧は屁んおと云知智者なれども耳ぐしら伎好めり
我俳諧すけ流とて下手の一癖なる處しき圓和歌を嗜て
或時菅谷匠江ぬし一と云通は支流と呂ちて申しやりけるに
「行秋の染ぬ木は禁へなけ是どもみおもはおもみぢ蓼はつく
之を見ぬし承し「蓼もみぢ来ぬご袖しほの衣ねどに移いろ
捨人よ蓼を賭る事も俳諧を論ずる所の斎藤あがひは紀行蓼　又右衛門
左り里に学んる伎記すなり　儒士を召事よ運て諸家

我藻をたしみ妻女家貧にして和漢の傳記我讀しむ是
身これに明きを顧ずなり始め東武へ來てより人の困窮我
救ふる事少からざりしとかや身の浮沈も亦定計る或ハ安る
君がゐ金銀を借らく遂ひ人の資用に施しいふてもしる
有餘を損して不足を補ふハ天の道なりとて歴戟をもてあそぶ
まうし此あつかふし文化改元の年中秋廿五日我ゐく捨らりし
享年六十有三谷中長久院に葬る

春日有感　庭裏有梅先人常愛故詩意及之　懐洋散人

忽逢世上物華移　遊者如斯歳月垂　庭際嘗聞言多道
中徒見游條舞梅花　似雪閣空地浣雪若梅感舊時無余
窓前人去裏春風含編憶支離

去々府君與余有舊臨閣捐舎宿草是懇

賦以寄竹子得　蘭綴　勝謙

孝子真何似周顒　恩豈平敬恭乗緯道次慶風簪聲遵稿
傳時俗纂編肆世名因君追慕切此係法羅脩

題俳家奇人談　水戸　森庸軒

父遺此書子刻之風流道義見于茲詩歌不及俳諧妙披巻
直逢花月師

たらちねの残せしくはる
こゝろの玉まつ月照りて　竹内亜卵

中くに今日を送らて高紀魂や此日は増添うは此教く

それ父の追福に亜卵ぬしへ
まゐらしてとて　江戸　嬌擔技

出おほしし言は禁艸や末遠くなき人忍ぶ種となれらむ　水戸　岡田一瑑

亡き人の言は禁らくく忍べとや只し面影も露の移ろふは

吉濤　菅谷正臣

十年はありみし面かげを露の日に見る追ゆく手槌き菱

呉濤　岡田光令

鮮あれはたえぬ徐き盛滑の尾ほどきのぶ人のいのしく

安楽隠玄玄居士

牽牛花や
さかえば
又の
名がほのけ

玄玄男　普青

うつむいてつんほの里あけの庵

玄玄妻　不英

露の日に十年はまりの秋さ川で

短奇ゆた咏

あれ世我玄里したらちきの云おける文ども、頻く五巻六巻の草紙とも成ぬ名家々々ま考へ侍るを吉なつらしけいや波し追ゆ起し年月や竹のふしぐに積流思ひは屋十あまり三ちせれ居まる京かんぬはれは医れ子孫先れし胃子がいふみをはふんずれど俳諧すけるをを志にめで素よりわ識なる者ま管く流邑風客是一句我恵なんれまや桂林の一枝崑山の片玉のしく芙泉への手向やつかせが幸ふかごとり之に波さうんらし

あさがほや子屋の竹ま波ちくどる

青青

諸国名家追福発句 并拾遺 野若不拘次序

篠原をいつか起けりて竈馬なく　江戸　完来
降雨の中にすむ虫くやなきぬつゆ　同　道彦
庭にふみ分路はあれども交りかな　同　白斧
初秋や村雲のうけ地抜はしし涼　同　十五世　宗瑞
まんなか日も昔にまゐらず橋つ禁　同　葉石
粟飯のさめけむ秋の月ぬかなし　同　宜麦
霧の蓮秋と定めし人も墓に行き　同　午心
露深の裾をいさひし寂しさな　同　登来
せみの亮ますりましく鳴や秋の蝶　同　仙鶴
此の月んすぬしてか吸けふれかぬ　同　青阿
三日月の限ぞし咲まむ紫苑かな　同　兆

浮世ことも老とよいおもし月これば　同　成美
おもかげのいざ移り来手向かな　同　平秋
夕暮や梅おもきすゞ略おち来ぬ　同　四碑
咲く〳〵流名や移転のむかし今　同　鳥冥
嵐尾花のやや弘誓の船のすなみ　同　四世　了漂
名浩のば流もろけよ秋のつ絶　同　三世　左鶯
琴の声の数にや乙しもえぐ流秋　同　嵐山
みのむしや今も聖りし音嘯す　同　二世　貞佐
山菜の名し実生をもみくと　同　五世　素意
松風に十三夜の秋ゆかし　同　二世　存義

水見れバ水にうけ行り秋のかぜ　同　二世　乾什

人の身に萩の上風おもへし哉　同　二世　紀逸

萍ノや利休が切花も飛ぶる月　同　三世　惺宇

末は秋の枕もてふりし流に雨の音　同　三世　祭暎

藪蔭ニーかりにす生ど庵の露　同　佛ケ

むざ抱けバ緒人南ふりり秋の暮　同　六世　淑十

雌れこぎれ者のさぎ花まつや水のおと　同　二世　永機

稲良や穂とれる種のたむけぐさ　同　百菴

露や露十葉あ波里の石ならいる　同　鹿臭

芦葉や主河うつ経をも今も啼く　同　三世　平砂

いなづまや出まらぐけく波の中　同　逸我

我ら行る煙りの人ある秋のくれ　京都　蒼虬

去ふおぬ陰うや鶉れら月ふしき　同　寉雄

菊の香やまづし花家をあさくさむる　同　宝稜

松のしろはらちに戸ばらん秋の月　難波　月居

何をして今日は暮らむ木槿が花　同　蕣和

何さがわや露まつ一日萬丈はし　同　寄淵

松なずし冬の郭ふつで文よ紀里ぐ濱　伊勢　仕高

逢坂やはびも奇まりも鶉なる法　近江　烏頂

雨戸まで光らす家や菊のあと　河内　来雅

落すらき夕ぐれぐくのつらね里　尾張　岳輅

けさまでもアゝや落きき月の草　同　竹有

我ばなしの席里みな曳き流し哉　三河　卓池

名月や照らしつゝ来しほどよもすがら　同　秋挙

め覚落月のかゝらば老ぬべし　甲斐　可都里

山里やおごせなしにも京紅葉　同　嵐外

拾さし紙のはかゝるかりぬ雁の声　越後　道庸

山の井の水汲よあまく菜のはな　加賀　其谷

寝覚て起て手拭が肩しやけさの秋　信濃　素檗

中〳〵に人とむまれて秋の暮　同　一茶

いかめしや遊び帰る跡あきの山　相模　葛三

霧はらいで見てもみれんごろ消ぬ　下総　木節

七夕も数でもちらと紫ぐ里の家　安房　杉長

青空や芒りさむき鉾がつく　陸奥　乙二

あかり取や静く仏とさげはれず　出羽　素口

米多く搗てちびしき纔の家　同　平角

蕣の花を長うする夜あけぬ　因幡　雷洲

出替はまだぬ露のたもとかな　丹後　月化

初秋の立つ紙やすし山の暮れ　長崎　鶴風

魂祭夜は露に座らせ独ひとり　肥後　墨竹

おもはぬ家もならねど桐一葉　安芸　篤老

稲妻にかさみおと寝る笹屋かな　松前　布席

いなづまや独りおちつく竹林書　薩摩　蘭叟

附ていふ法筵某士の秋風をひろひ入といへども未漏るゝ人の許多なるは桑胡遊屋だく〳〵句稿求るて後まで紙を以て此冊を成なり

蓬盧青青先生撰目

一 俳家奇人談　全三冊　出来　竹窓玄玄一人遺意　青青先生著

一 續俳家奇人談　全三冊　同　著

八朶園寥松先生補校

此編奇人談の遺穂を拾ひ近代の名家蓼太白雄闌更曉臺蕪村おにおるるに俳諧の法名家一人ごとにそのおのおく其人を撰ばして最多くあらはへ其俳談をあげ古人の風調を窺ひその篇中をたづねて後半篇の圖をまじへ芭蕉の十哲像並に発句卑月平沙の繪をも圖に筆勢がしもあまた此を得る模写しそが其篇の書画図にゆかしくの世にれる古人の書画紙上の見合ふもたるべくすべて初編かいやましく奥あるの世にしらるよりのの世にのあらしもしきらんのひお編るもに在れそのちまぞ陪しき沈絶え

一 椿年画譜　和人物之部　全一冊

一 同 二編　人物花鳥虫魚 草木山水之部　全一冊

俳家奇人談巻之下

竹窓玄玄一 遺稿　蓬廬青青書 参訂

中川乙由

麦浪舎は勢陽山田の社司にして姓名を變じて中川梅我または乙由と改む常に隠栖の心深くして凡人と會する事を嫌ひ居を麦畑の間に営し自ら号して麦林舎といふ此子芭蕉翁の末弟にして翁没後は支考涼菟等と談ぜしが始め口調を「荒径に驚れはど冬や飾縄「かかる帰れ扁に見へしや衣がへ「羽秋を送くまほ紅葉の露「ぞう頭を鼻の上ぬ寒のみ「陰ほとも深れ哉や冬籠り跡ぞそのきこうるいよ花揃を発生しけり山桜「咲咲る哉と淋いふ兆で行老後の法術を不物理云ふ正風の真実を

得させ乞ひし或時麦林舎に案内して入来る客あり いはく
我俳諧を学ぶに志あれども未だ式むづかしく覚ゆ 下愚の
其者にも道へ入るべき修練ありやと答へて曰く 志さへ深切
なれば何の六ヶ敷事のあらん 又更に初心句は何様なる
事を我申し侍るや 答て 唯眼前の風景を云ひ有様をかざらず
一句作りて安せる人 安らかなるは是より我見出すなり
折から冬も半にて帰る人かよふ男いと寒げなる誹打ちるさぶ
行くを指ざして何迄が使ち其句の姿なりとて「冷寒誹
かさげ行きさむ時 京又附合れ転変に及で 尚時此人の右
出家老なしこいふ家に云ふの語は一年流寂手刹る
者らして支考乙由舎我催す衣は息を争ひしにけるが「老
僧の影を佛にみせて臭しといふ妙句を吐くいりて此句まで言

恥ぢ入らんやと各冷汗ながしたるに 軽口のものいひ出てなふと
執筆その句を我席しされば 一座よろこびてくきをひそめ ぬ既に
一れもてる道ほどに「拭ふて三河と椀いらずみにとりふの句
有ける 支考頭を揚て「老僧の白紙仏に見せよく臭き底と傷
詮を咎むる考答て一つ生死する里句と云ふんなる我恐むる家
の妙句を惜むなるといへりしが是興じ添の里し 或人変の法
流儀は百韻に至るはいく門 何の玄妙いかりやと尋ねしに
我らに古よりも儒も是更流く知んとするならば 先哲の
編おける書ども我もく見せへと申すなる書を初心の輩
用を窮めて修行の我前つにせよといふ 亀鑑となるべき云ふ音ら
んにも花ありて又狂遊戯場を好むの癖ありつつ人種くみ流と
り人ども夏に喫入れば人々遊て曰く 我は沙つれん何ふに俳諧沙流

連中

又の有心

丈人容貌言ハ句作をはなれつゝも古雅なる抜からバ抄じ花ハ挂里
小野を催し三絃ひく傍ら一案する時ハ手裏化に後れず
我また世塵に背んきて俳諧に遠ざかる故に老ての後道を修て身
我終る夜で遊興をなさずとなん一日戯場へ行しに相識
なる嬌妓隣座へ来居けるが後ハ貴方に打混じ終日酒を
しけるに次の日も亦同伴の人はやく入りけるに又むかふの
桟敷に昨日の娼妓来り餅菓子などを贈りけるゆへ夜なかど
中返しける時雨深草や今日は何ちかふ桟敷の嬉しげに縁じけり
はなれて挂里に更る老の身を隔居すく古人まなれぞ識むるハ
手数ふ人はよかりし我がれ此子京都へ雲恩ぞ生くして手腕
に屯らんとはいふ所しや洛の東堂が逸りしに芸を嗜よむ
付ハ我及ざればる人我評すべからざるべしと一人芸波が挽けん

旅れ何より聴るよし一載に流を衒とすべし

舎羅

元禄の頃舎羅は浪花に往して賤業種は名を忘る
者なり「蒲の穂や浮きて寄る軒の妻」此黒犬を以て
畑や九月尽の浴を傾ける家に芋が軒端延をうけく雨露
を凌ぎ且孤我身く侍とほ実てし擔石の備もなくつまし
女と陋巷を床む金子の中枝その風流を便く聞その居
我村ひそかに幸ひ羅と共すく同じ芭蕉まで請写
続けぬ危留して往を正く此事など常事飲食の設け
なし枝懐へゆく何を往ふさぐ柚やけると居宿する
如罷まそく贐も我家あらけれ一柚をまし償や持
なふる紙袋米のはらいは糞てまねらせんと枝この

之を探るに漸く米斗合ばかりも何ぞんといふ羅因く至来まで四人の口据を営みなりし古すれば投姑らるゝ禄る短はねらせし其枝保あぐりも至識量の卑らるゝをば感し哀りさうや或年此子より句室へ来りて又は玄つ紀変て拒吟して極里尺げて隠者都所は夜盗のへ入りとて生りけれども諸ひめ兎然はの屋き西も有屋打して仕合のちよさ者もなてばちれども是ぞとん掛まるすりや太るすけ豊あくあめりんば「盗も酒がちなれら鍛得とおりして打砕中はちに軽従坊吉の地ま居ら丘ひて「ぬすすれく手拍を落し何変なのりこ

至雷落まんぬ屋し

露川坊

露川坊は伊賀の人なり尾の名護屋に住す兎の蕉門の古老なり時人いはく金城に枝あり護城に露川あると称したりとぞや「有て在紀角おれしろや堤牛「稲房やわらく来くねるきまぐれ「須くし鳴や櫓の音するは頗「茅刈のたしく出てす雅菓が家例翁殁して後私説をかまへ其風俄にたかふ派の支考ま物を発して送るる文あり名く露川貴といふ川楠をこ返答の書を作るく言鄒を解く是を名て合相撲と号ほ

言雅百里　附琴風

言雅百里は魚を鬻く業とす旧目出比文ま田く我始免蕉門に入りし時は茅風とり入り後童中序まちさらて三十六年又いちく蕉門なり枝風仙風あり仙風を子を呈ほ

其に十一二歳の夜なり後嵐雪翁が弟子となり廿一歳にして
百里と改む今日より浴後で俳諧一日も絶ず二十三歳の秋
頃までは千ぎに精工を極め門戸後世に家をなし論
難起りて俳諧治徳没して云く俳諧の道は事に見ゆるを
宗祇後芭蕉翁ての後と合よりして俳諧に入たり此子家
冨ぐ常に調理を能す事作りもる物を肉を耳鳴る喩
るに物なりとし寄残念して馳走する所に酒の調人此望む
所不し定る時は終日終夜といへども事を辞する事なし
事なし後くして風流なるを又都の如し享保十二年五月
六十二歳にて死す辞世「死ぐ途て涼き月見る」あるぞらし
事子嵐雪弟子ぞ雑談は里事語り巧なるまた後世人の
知る所なり

琴風は雑波の人何某の後より江戸へ来て蕉翁の門に
はそふ游びして後晋子に従ひ学ぶといふ如羅栞と号す
「宋茶眼里不居る柳が下「宇舎やいなけ京杞子ふすは
らぬ「猫が意鼠をとらぬ家なり「買時よすする白
玉まつり尚時琴風百里と並べ称せらる浄老く胡五へ
帰里病で死す辞世「一息よ此味ひを喪れ」

涼門瀬十

瀬十は江戸の人晋子に従ひ業を受く初め涼門と僧して
より代く此残氏とは幼なる時に暹山といひ後老嵐に改
め又嵐雪とも云し「梅が香や此処く出しめ井の蠅里
「志だらんし霊の為なり「桃が花「猿掛の母のまへ」「紫の
置の京「鴬坂の長刀はぶる宗和秋が京此人容貌異体なり

落髪して鉢の坊け尺餘身にそへ法衣を着し頸にかけ
頭陀袋掛るに郭公極のおきて平生托鉢の洞に
その性酒飲を好みて天目に酒一盞を汲て度ごとに醒ずは
又手むかふ人その醒る時なるを待しとぞ又三年
六十餘歳にして終れり

秋色

秋色は武江の人にて照降町菓子屋大坂屋が妻なり
時は阿秋といへり少年より風流の性にして有しく十三歳の
春上野の花見に行て清水の観音堂のうしろ井の端の桜
を見て「井戸端の桜あぶなし酒の酔」と書たる其碑の短冊つき桜
に彫りしおはしけるが本くに附る諸奇俳句を代田くて
元ありて甲乙を評しまひしに此句おしまへって其時

秀逸にハ極りぬ後代までも秋色桜と称して世にも高く
聞えける晋子に入門の時「堀さらへ里の萩に並ぶ女かな
遂に業成して習つくし「翠簾籠けしく雄書ちよふん涼さ
「ゆのらふの紅葉に染まる里は女ごの「獨居やまろみ火鉢
手枕の世の中老練年投機をして晩にゆかずちいづ秋色が
家にハ後ハ寂後志ばらく河東院に宣を備わ
聞ゆ晩年に及て瀬十八毛を傳与すといふ一年何某
候の山荘に召され庭園善尽して観覧せ
興ゆ色が父さいちひの折々露わに身を屈川し
傍の見送りありが折々雨なげけしく降いづ猿を
興秋色命じて送らせらる色父の供して帰参せ分を
驚歸どもに聞支いひつけなるに父と入りにて紙合羽を

故ことハ竹子笠ちりぶ里裾高く引かげ動るよ流く故里之
知る者更ニなかりし　されど其孝ニして殺なる事大卒
此類なり享保十年に月身罷りぬ辞世「只一夜の覚
ても色はかはつばさ

紀文积子

紀文ハ江戸の人同苗紀伊国屋文左衛門を紀の熊野の産なり
武鞁人出てより以来父子ともに大ニ富めり皆ニ俳諧を
好しんで晋子ニ学び父を紀文といひ子を千山といふ
「人丸の竹ぞ松宮沖は帆ニ」「果ろや年は経どもおぼろ月」
紀文が句「香りんす老の眼や古雨千五百集ニ千山秋宝
雲永の終よ云角「陽よ巣を鷺がまそねらん」すらかなめ偏さ
千山辛年忘ニ「別すとや八乙女神楽男より盃一世ニ

慈衛ハ遊興のみを嗜く風流なる事紙称を
桜井吏登

桜井吏登ハ江戸の人嵐雪に随ひ雪中庵の号
来るが故ニ此旨ミ子ニ兵官を附与せられ其の
老も己に隠し翁たる事とて即ち之が業を譲る所の此
子を以て雪中二世とし神免人左なき班象ともいへり
嘗て衆の勧よりて菊月に嵐雪といひしが稀なく又
吏登に更む老後深く隠逸して巻ニトト居せしは二
枚を並みにて出なつき桃を座に寒に膝を容るの席
もなし一客来く壊時をおとれて訪ふる人のまことにもと
はずしての客いづる様続くので風流すともなんいりもたい
おいりても清し雲風韻の断を云なる筋は和すも其君なく

実に陽春白雪とや称すべし。猶ある代ほまれの我が一句あまりし。数年の詠草を棄去て唯十八章を撰び綴るとぞ。其里「梅咲くや門に春の里かな」「大竹やんとむさ紀の六月」「並すゞ紙衣はのくと明るかな」「老の秋明こいを咳おもちかさ又白像自讃「おく露や何にかなれとの古茄子」宝暦四年六月廿五日終りぬ。

水間沾徳

水間沾徳は江戸の人なり。其の磐石と号し、時より俳諧を好く。露言がゆかしのち其風に露沾二公に仕へ侍る列りしが、一年飛鳥井雅章卿に和歌の道にもよりて奥州岩城へ左遷ありし時、露沾公の鬱悶を慰まゐらせ御伽の老撰ばせらるゝ跡も、みな荒く武士がみゆる名公は上蓮のおもむきは深ければ、

如何すべきと思案の折から涼たるを進る者ありけり。任士か一見て其まゝ此旨を詠ませ判断しもとく名残哀妙と賛す。彼は三年など配所に在つけるを猶夕に側に付く和歌にて古き宴なども懐はあく露沾せもとて桜をく帰洛しても露沾安敷にむかひて因ける。此がなしは和歌にもいはもきよ其俳諧みを遊すほし。として生れなかりしく清髪此才何をつきんぬ。一直ちに露沾公の数を更はしめ露沾とにいひ後沾徳と改む。同く夜く上に遂し道へて一風を起し、享保の法をいくいを収く世にし、折り合飲瓢と号し「元白」と称人をして入る。又ちらか後の伴白にはふかく雅意を含く又けなく「百姓此家の濃や桃の花」「清貧にして網竈の花」「水と羽さ合ゆく夕すゞみせし人能出ぬ事」又点物はなさで餘来餘毫揮毫

即揮毫といふ文字にて書は市に代りて今宋画家点を加ふる
よし此人の始めは享保十一年あまたの業を以て十二にして致す

蕉居治涼　附　以当

治涼は伊賀蕉居の人地名を以て性とし神名房以当とよばせ
東武へ来り一鼎がつかひへ南仙といひつゝ後露沾公の教を受て
より治涼と改む此時の句「十分に溜ふ露や夜寒の展氏
雁下應満く南仙斎と号し「浮さ沼や蓙の織ぞ古き秋の色
「営れ過眠素性なりてぎれ「唐土の一里と髪の蔽ひ眠らん「眠白は
ら事象を以てみせく福寿手素より多才にして和漢に出て
揚徳ありて述する所俳諧綾錦万葉実筆満く江戸砂子素ぶ良云
虚種々の作ありて後人の為にし残納稀しつ延享　年
神国に控く死寿り六十有餘其葬す蓋文以当は之風流なり

やてしや舎と号す句あり「齢ひ石を払ひいふの今朝れ去

大淀三千風

大淀氏は伊勢の人一名譲字友輔十五歳にして俳諧を好み性
敏にして此事を怠らず身を以て猶ますといふ三十一の時秋つ
みちのく石室と名く延宝中一日に独吟三千句を吐く句稀しう
三千風といふ寓言堂又無不非軒と号す「此いふり豪く去うに至る
松嶋「笠に来よ己望叩くす一葉り回方に以補して奥の仙台
に留る事とする手頃ひ所々く去り又出て扣御大磯
此沢ゟ縁里住し此子生滑名利の仏ふらく之趣を捉め勤
進して雲地とし西行庵を建ていふ祐成か寿虎女の小像を
あ安置し鴫立沢を呼く古法此流連続と呼其を生年式に於
鴫立沢となし其名所に讃まし是つる稀なり　牧勤を号

其一戦已知而後ち亡ぶるハたちまちおのれの狡猾なる處しや
當時の口号「一路や市西行は知らぬぎよ是より市西行と人
此呼けると云。市雨不し俾戦後く東往居士と自称
古行旅の笠渡をもてとりにちなみ此句成る名號に殆
居しこれ遺言云ならく里舞世「今日ぞ見ぬ世の揺れ衣かく

立羽不角 附 辰角

立羽不角ハ江都の書人なりはじめより不卜が門に入り俳諧
に染て雑談せりやがて此句「けし園立本の端でなし」芭蕉の端
松月堂と号す虚雲斎南々舎ともいふ叉千翁と称するを
つ子チ人々は何枝なるよを枯名なり出るを得水に学び画ハ独
立しても自ら楽む初め露紋にしるし時當く冠里公の法號
に得菜しょりえ且菘蕪お借すとて「法雑煮やなをとい

かゝる所謂れ甚として奉りける其年甲斐公執政の職に補せられ玉ふ時ち清泰紺すそめより寵遇他に異なり武時公「是れ夜や吉原をふりくを過と戯れの法諺に應て「坂の菌をもさへ加しおすのたこけれは世をもおく達く評判よく次弟に繁昌して自ら千金を富栽為王正徳の初めへ堂衛より濱衛へ轉宅する時諸方は倡護を行附てともに出しそ「六月の暁白家蔵は はらひ所為をなく京橋邊りし地変栽求らく移居は於宮　官家より江戸中の居宅成丈古跡造立に為居しと浩洵なる住ち去ら命に從ひ志らくなる發遣ゆる成たるり栽様をなく類焼して数年著述なる珍ます栽失いぬ後まどもに有破海きよかんに筥今世に行はる此人元禄中に法橋に進み享保中に法眼に昇る繼する法

眼とばり罷出したるは此人に限流なるべし始め其旧男辰角坂舎町小河家の養子と成添姑は家業を継でつりしとて京出きしと流を流く「題呈火りしけぶりし人して洞りに又「けむいめ栽すれば宿安地故老の家絶てりまなく畫家に廣く八十をまるて卒するとぞ晩年居栽狹治橋つめに移す今は旧變風して一流をなす旨栽化為と称す皆人の知所なり宝暦二年六月九十二歳の壽を終ふ辞世「雲蝉は素かん裸りし逝しけり

大高子葉

大高子葉は播陽赤城の士播州浅野侯に仕ふ京坂一日に居けくいざ帯はれり山桜「初め江戸に於て晋子其角の門に入り旧その汗芦角嵐雪すみなる嬉世をうつしる人は句栽集ることに「旋天に菰大名や

句は後会す時に居士同会して復讐の噂沙汰ありけるに篇る出しよ
りぞ後を彼是の異論書幅に示して何ぞ蕪村が堅く座にて成りけり庄
口や手来に蹟の書ふ其成りけ一通りを伝へ中には猫を拙者が中
両存の節雑談に今暁存せる中には話の座には雲情彼是沙汰
生く世くに及ばずに沙汰人一山を我発句もちふりて松れも
窓狭く去帆竹の句も同じ所にては淘汰を存の如くなく
此君備君蒲団中へ文にて手経打捨壺中には一句の引導を
頼けり　十二月十五日　子葉

沾徳先生

はる年は去舎飲宴にて追悼発句一章を記して野遊の梅に
りぬ沾徳「蓮るり此幸子部を涸ぐ家其角一枝葉汝で名残の和
は光りぬ沾洲「其骨は名を雲ふ東の家雲霞りぬ貞佐は是友人

沾雲郭公の句「旧き梅は文武具の家鴻を句に世を子規が岩よ
茶るの我情しなりとぞ又その句作を家枝出来すしてて指俳
へ全盛せし其是時蔵士何某の沈に名より

加藤暁松

加茂原桃も俳号笠屋は人（武本より伊賀の産こなたの八坂にあり）蕎子を師として風
韻ゆの猩猩庵と号す勝る文学をなさく学び又覚て和尚に
従ひて禅を我修す初め若くして時伊賀に阿渋津に遊び禄
上勝して仕せり虎渓居士と自称す老後に落話人となく宗匠
さまに流人（此子のすは容へ人個々の考の噌此へあし以節と互者すむ）「頂て水に河原へも枯荷
霄や翌の朝の食を覆落可恩ぬく妙んるれば東て
骸骨の画賛我包ふ其より秋よ軒つ漸りしくおれり一巻
や秋の蛍の小用みつ筆を拋て本葬は四つ人の句をかけい一

辞世と為さいふ時ハ寛保二年なり
原元は個肩と称す澄江八幡の人なり京松に於てあらかじめ生
酒を好み元来慷慨す江間まく人と絶倫す一蓬くを
死ぬ際に自ら示す「神雷や花は雑の籾みなり世に無き
俳士の属にはあらざりけらし（米田子此発句にて実事略）

松本澄江

松本氏は江戸の人晋子に従ひて俳諧を好む初め潤北と云し
時世生广仙窪ち澄江に遊び大に鳴と安己と覚て半時
広澄江と改名し祇空の室に住し仙窪と相並して頭
人此耳目を驚かせり室仲英道の才は川て実権を及び
中ある此老後を祀極と生享保此法名は才に震ふ江戸にては羅
人翠秋と子らし浪速にては奥洞花を撰ひ人あり

俳諧此句より生せり「沢蟹ハ春蝶に蜘蛛の手なり」「玉葉院
行れバ思ふ人が年一夜よ此句を袖にちて此古骨を負く老
衰にりけくいひ下の句ハ二月中旬に仰を輪だといへる古す
我ふまくて無と表のかひだ々をいへる何某と云我なし
たる吟詠なりの時了宝暦十一年霜月八十八歳にして致
す旧年思ひうりし免死する月を定む臨中「朝霜や杖
で画が絶し一富士芳山と作せ置しが時月符あ我合ふ臨と
兩奥寄せて此子はじめつが生の句にて「梅此翁なるんで同
梅の如きのつや示して工夫きしも挙く暁る者なし寛
小吳綾無至席といへる俳家なり此子抱かね寒夜その墓所
一滴しに梅二本ありふ句我碑に彫つけう是をみべく始
て梅花の句解しなせと云ん云あるれ禅家我問答するよ

発して作麼生の答へと問し時答へむとせる人の答と有無
此役名づけひき知もせぬしても喜蘭輪をと称すべし

桑岡貞佐

桑岡氏なハ貞了我といふ還俗して平三郎といへり晋子
に入りて名を平砂と改む（平砂臨終後に貞佐　おふ斎貞佐中川貞佐何も同号なり）
後桑々畔と号す「出る三日人なつかしや猫の恋「猫のつま
ふ役に見ゆる牡丹かな「神風や吉野も目に霞む稲此花「江
海きらの鯛も穂によする今日此日人と成り貞佐律義す
て人多く積み集ぬるふうんづく子葉（大高源吾）素帆（宝井其角）白
砂（吉田忠左衛門）竹平（神崎与五郎）等と深く交り時元禄十二
年三月浅野家断絶す皆散々に子葉等を三才一夜表して
貴信を継しかり書を交人に術をわたし人望里不く於

泪せし事に竹田とし名合ひ絶く久後の掲げられ里し掬糧
い世宣文たりやむりしに整らば往来し致ふや思へ答へく
陰くらふ実なれ何けく今の絶交立里と佐字了識ぞ思
ひ文ハ若く安ままあり我螺して中直し後れあせんなど
積る陰徳よ晴らり里名残ましくと立むおきそれより
洛を来て巡礼して江戸に人級里来添七年此篤志立端て
素帆よ泪連しが近頃京都より下りけるとて里よくて掬
懐し掬此肖實此句立る里とて「乳でのる手まだばぬ
霞ゟ又子葉が句などと出し廿篤いりで何ふんや佐い川陸
おめしろしなんど答へ去ぬれぬ言より三日すぐく手紙
入湯にまりしにに入来る人はくよ晴れ浅野家の舊臣大
安集會しな石吉良家の館へ亡君の鬱ちちりとて思ひ

四馬　五紫　六龍　七離　九雅

番勝　懐紙勝

四　一点

五　一点二平

六　一平

七　二

一日長安花

宮子

萬國之花一拝晃號

珠

金綺

蜀江錦

呉綾

王鳥羽

俊　米　長　豪

亀遊　小角

大極　蒼溟

鼇濱

田雪

新月色

同文錦字詩

花影上欄干

所玉淵齋　朝陽館

金枝玉葉

年時庵

以下從多勢攻殺害し此曉ぐさ不忍川にして引籠
云けら声旅などを翔ハ先日春帆が還りし発句の意すゝめさり
四人とも必ら泉中に浅茂し足湯へをのらず玄形に至
直ちに高縄に到り或酒舗に入り急ぎ一檀を破ぬら浪
すゝめり今路あきまふ舎章れるゆゑ價ハ接来らず後日
お遠ちなく拂ひし其質として此羽織にし蓋を奉わこ
何某様より拝領の物ぬひで巻し色を泉岳寺れつおま
いたり宮殿に此中に暴袁度や彼氏大高度や主旅
矗酒はぬらせらし遽せてゐんぐと喚られは　寝泉より
警護れ武士のまる来り門戸残寒く入ばみる強すぐ
なくてつかまゑりくしが其深切や通じけん其中に細泉
人のりて大に感じ其侵捨並れよ履ぬるすい宿てこ泥と

風せし。右侍ハ其意を喩り、彼所何某侯の御館に遊びし歟。
や御座にさし上れバ子貴御前にある何用なりやと御尋られに
答へ今宵たゞく此ほどにて御紋附の羽折を贈物に入置し
ゆゑ念の為御尋ぬけや上翌夜さかりて汗みとりて居たり
歟いまりしく思ひしたるの驚實なる故称美し玉つるとなん
又或時野分の句とて「何事もなき野分の跡ハ十二文字
はより起れども上此五文字をゑなみにかり給ふ能諧
来まして謹じけるに甚いたく野分の意ありの十二文字まで
とよりも字数合はんとせしが二級に渡らく悪しき仕になんと
依て十二文字にて野分此一句を定さりけりとや。此人強後につ
子るの遺出にかな顕して野分居士と名しとぞ。ゆゑなり。享保十
九年九月六十五歳にしてこの世を去る。句「中揃に白るゆ

盈王十三夜

活井舊室

活井舊室ハ江戸の人、梅翁の風を慕ひ俳諧に鍛練なり。或ハ
賠賠坊ともいへり。身の丈大にして人おそれをなくし之を憚る。世ニ
天狗坊と称せり。一流性に酒を好む。一ト日酔興して或撃剣
剣家の邸中の奥に立寄るに、面白がる手に出て、道場へよろめき
のぼり、試合なんぞせむといひけれども、容貌の見くぼしき
故感じ入り、言をも立合しむ。室何の苦もなく打すゑ
られ、立ちまち出て、客を投出して「夕立にうたれて細る田面哉
皆其の言を尽く抱腹倒してあるいはなりて其紙を捧ぐ。家に
くさ又その風流なる事感じたるや。其我此衣をより
此或酒屋よりいふ酒ハいざせよと呼べれども、豆腐のいとなみ多

罔なりしや甚ふわ睡なりし実娯なりと云家残せ
「遠入ても嗅物は京し鬼まちが弐年に至路に「日本絶
地一枝けの言まく孔子君賛「至年をまれたりしのほ
と抜けく釈迦の賛「蓮は実のどんぐ変りぬ親父の家
気ままの家大宗の軒なり

梅従

梅従は侍歩ちん はじめ魚を売業となせり生来俳
諧好んで神風館と号せしを古老守武をまなひ
なが屋し雪附合は己が長ずる所なり一年加州に旅
せし頃金沢にての会句に俳道体を示る時「うつむ
けく弁は体みりほして ある又「判気はあれど噴気して
居るといへみよ「まりしや捨られ物を盗まれく此文

字は清寄は京しの詞と称まき此しこなり加
陽の俳諧者道の名のれ半は梅従が風に変ずるといふ後に
涼袋世人残しとし 又附合の旨趣をしらず今集を
閲するに「侘此えと十日の菜も滞えてあるに「釜き」つ紀
叔が来て居給ふ又「天狗から寺中いから慴されしといふは
「侠者一通り清盛でいふ又「寝藤物は灯り紀えてくといふ
に「米搗人は月の床覚いれてみくと何事も梅従が附句なり文
筆にあるの跡り里しかども自然と滑る所の滑稽ありと称嘆
すべし

子瑾居人

子瑾はじめ竹雨といひ後居人と改む江戸の人なり
從く俳家に中比京師に移住して卯鳳窓と号し「往くも

るりと流るゝの木芽かな芭蕉翁臙脂花の什三曲を冥ひしく
三代目に「虫寝や風に鳴るゝ是は川蛙譬喩も此如く亦
何ぞ妹んや「鳴る雲がゝ河越に蝉の日影りに鴨流余景眼中
に在り「女郎花また傾や説世が響楽の中に煙を移す「一夜
づゝ淋しさ増る時雨かな「煙けりや我宿の上つゞく紀行落葉
二句とも和平なる種子の老後に武好く始めて経まで言ふ句とし
号し法名を宋阿といふ寛保二年六月死す齢六十有六
辞世「おしらくと有ともおもし西の奥

坂内納雅

坂内納雅は武州の人沽旗を好とし宝永中京洛に遊びて
羅人と名を号す又化笛鉢と号し又長生庵ともいふ「狗子
は月我ふつちりと明け落去「油嵐獨に秋風と吹く雲ゝ坐

「其角宰の申合く咲に乃月西洋より大家来至ける時
「今や引く寡士は裾野の陀牛此句我　鉢乃大進我は髣
喩せり称嘆せずんだ有ぞりふぞけん人業るゝを嗜こと
器我弄す亦此癖何至又戯画を継すると巧むかし此
立圃許六よともにけしく減せずといふ岩に巻中抽づべし紀
事あ亦附るゝ事我為りいて汲く縮る旨を画及第といふ
俳宗宣事の有るりよ好りし文るゝ何思く種なるゝ
人は及びける所なり寛延元年至十月死す七十有四歳

千代女

千代めは加州松任の人少小より支考のつに携ぶ考死して猶
言句を得ず或時蓮池の盧元坊に遊して来れる折
それは稀有に詫く然るに才子とも梅画は越の異後此に従く

元日や
昨日の空の
気色
あり
しら様

千代尼

よまなり武州国府画讃よ示讃をこひ下に之隠おれく羽龍の画
西をよく画く主下に「羽良や地に咲花と何ふなりし
玄師妙なんぬ座し始く支よ乃くらる時ハ渋ろうなか
ご枡宏初鶯里我子我先ひかる時「情堪殉今夕ハ何変わるで
何らかふ香情態を備え思ふべしはど先哲の乙由女千代女
へ文学しける端に「落ぬ身ハ鐘事漆柳の品性女の海
乙由北才へ文学つかる端よ「窓皆ぬ身ハ狂ひあ純柳ろ品双才
同時し並きあく同し淡友唐よ差しける千代め与れ
文我冗その句を考撰よ我と同業あ主とも狂の一字の論
古の流に及ばざるに嘆息きわき選返あるるりあさ初の迦
後よ尼となりて素園といふ遂し佛名我称するより
細かしらなん之果唯一心の名我「古る古の玉を菱一節

より黒露は俳諧は拙からんなりといへども此佳境に入ることの少なし

山口羅人

山口羅人は漆牙斎と号し又は禎山ともいふ若かりし時は淡々に従ひ居里後に感破して更に風を起す嵐山まで「蕎ゆくや帰る人の初嵐「身中から洞をすまばの暑かな「借ともなし人は醍するぬかりのけふ「霊前日やらぬ江の渡も聞ゆるの文の法郷は俳諧を以て雷にはるし一昼夜万句を備ふす後に号を改め老桂窩といふ漆牙は号を改くつ人羅になりとふとなりけり子は止め梳屋吉兵衛といふる出羽あり素より家富といへども天性時務に疎く次第に衰微し業を廃して此道に帰す漆牙といひ羅人といひ皆卑下知ぬなし宝暦二年五十四歳にして卒す

横井也有

横井孫右衛門は尾陽名古屋の藩臣なり性淳朴にして文雅を好む俳諧にも長じて世に独立し人に諂く交く我ふ俳諧は妙なく又つくろふもなし唯正直なる小児の言をごろに云はせざるかおもむろに又七五にかなふべし此俳諧を也有といふ「松風は里何處すでに帰り「生娘の神達の御雉の声「昼寝やすらかに覚ては露を召に合は「婦娘いつ殿で葬かくれの一年「楼木漂て己を高ふる人は瞬くに倦く初く対面して一作物の生能みえり枯きはたず誠んなるさる大概ちは数なり又述する所の類あるを浦の梅瓏父鏡小彼芝答の俳文その実体にして鼓舞盛にる比数なれ先輩を既に之を梓にして今まさに世に梓

かろすおもと詠く香人の風流を知居し

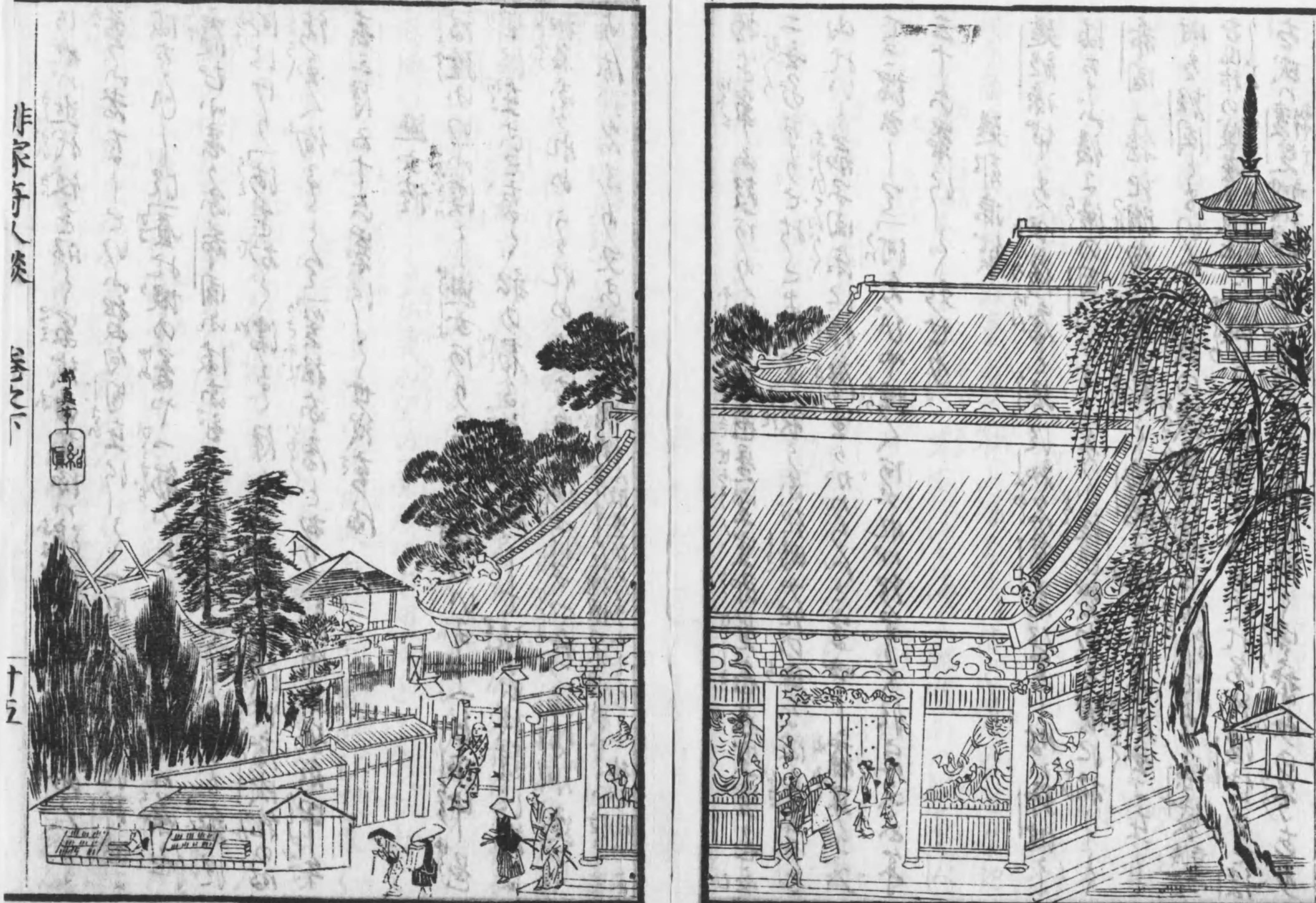
清水超波

清水長多郎はじめ味噌商人なりしが風流の志ありて偏く己が業残厭ふ一日俄かに髪おろして家紋の巴と長の字を合して長巴と改む初婚し素嬌が許へ往ひ行けり流おころいて沾洲何がゆゑか其姿をかへぶれ面白やと宮ふ巳世栄比ら係けるに祇の如き者の尤も答ふ流すさいはく常の座ある紀其るる常に作ん余ふしと今沾洲がすきをはなれてよ俳諧のみ遊ぶある父余が常に従ふに居しと彼ち其後が方へ達ゆ紀縁して一人ちいねばなり流が見る所おのづと遠ざかり遂に一世の作者となる超波と改名して獨歩庵と号し「水鳥に実はけなし神が門の頃のむすびの糸と積るよ尚る草臓り茶又は古譚なりし」

物生を尊ふ教なり仏は即色是空空即是色色空空色色無二無別なりとぞいひしよ人皇孔裏ら紀略の紀の血を皮に書きを山比いふ荘子因果に作麿生かかわらんと寄咄し蔭耳に入て二端あし「河をなびや濡く人がれば紀里くに元文五年三十六歳にして死せり

建部涼袋

建部涼袋はじめ吸露庵と号し俗名喬庵となし時に野坡に随ふ後に洛の西川がすまゐ多くに従ひ叙句を賀に振して希因に従ひ附句は勢ひに赴く梅路に依る一年北国に在し時に故国をもいふ武の浅草に居を卜してより涼袋浅草寺つ古風体の異風の残を二つ改さり俳諧を廃めて片歌道守と続或は綾足と号して亦画を好み寒葉斎の号あり


郁真亭

けれバ近代伎を眼く家残なせ流ハ沼蔭ふて浮浪と此人々若ぶハ老ならしさりハ發句曽在けしく一風ハ拘りバ跡ならず流れもひしは「昼の坂の菱や一筋いとのつる「村くハ蔡隠龍む小麦の京都国ふ流れむしは「浦けぐる千鳥も縦は明にけり「汲をおく濡るく月白や不月雨満州宿成就の時法亜人狗るとして「笠短本磨とおりく初時西安永甲午春三月五十六歳にしく世残を去る

遊女浮

諸種ハけハ淺る遊女なりし我 捨のいりしもと市中邑里に生まさ下く狐の宿る定ま群 して猿衣残騒にあるま和名京ぐれめうりれめ 多すれめ 海士の子一夜つ流宿水逸るよ応此名なり又さ出斗残 傀儡楽するに傀儡ハ木偶戯なりと注して人形遣ひの子を本りむり 揚が雨の途

より人形流いしまく遊女の人形を… 来れるなすり雅息劇する所…

昔より風流阿里しハ古今此後撰の拾遺後拾遺の宮本洞蔭な麗新古今此妙玉葉ふ初君何るひハ近世江戸吉原此勝山宗女等の歌よ見るハ婉く盛く我なひハ拾ん風流の称を採らる東武や里の奥が八雲がけざり京ら也芭蕉翁の時世まぬ撰集ひも無句残加へらへれさり或時むつおぶ浮里会する男へ中云しなる者ありて契りを見えくく京らんとするに「差死京ぶハ我塚でなけ子観とらんとちりけり時人後世の依業加賀あす里と評せり固ハ蔭隠客の果らける秋を舘しく「男な枕寝覚えさまたい坂枕ろ京同く涼え似人ゑし蓋して卑ア此句を「手数ふのとなりかし篋の菊の菊京紡紗京此坐つき菊實あ女なり平生蔭紀代の枝を附しき初ん

313
23

周清外史

日本馬杉繁先生著　全部廿二巻
清　王治本先生閲　合十三冊
定價三圓廿五錢

近世所行ノ支那略史ハ類記事為簡ニシテ實ヲ省キ怪異百出荒誕無
稽讀者之ヲ厭フ先生慨然トシテ筆ヲ抽キ上ハ周ノ平王ヨリ下ハ清ノ今日ニ至ル迄
治亂興亡謀戰忠邪ノ跡歴々ヲ詳記シ怪異ヲ削リ荒誕ヲ糺シ以テ姓氏ニ因テ編
ヲ立テ日本外史ノ体制ニ倣ヒ名テ周清外史ト云フ嘗テ稿ヲ先生ニ請テ梓ニ
上セ世ニ播ス冀クハ讀史ノ各位最寄ノ書肆ニ於テ此書ヲ購求シ賜ヒ其
直筆精妙ニテ跌蕩ナルヲ審ニセハ幸甚

東京日本橋區本石町貳丁目
書肆　江嶋喜兵衛

なれ里と笑つる人に答て「法意ある身に似合しからぬ業なれど
難波の遊女にかし」連聲了」我形を脂川風に糸柳越前を
三番里に寺川といひし女はわりなく契りける男ありて
二夜三夜宿らで暁ごとに帰る我打うらみて「行水のつれなき
よりや朝露来れ枝め何がし武時の吟「思ふ事と積でる
くつ脱沓に何事の所ぞ娼妓なき里はしんと流るる者その
寒情を味ふる我をのきて曲輪抜けとせし中おなじく旅雲
「初霜や誰が添ふ枕目く」結「夜寒とふまたるる
洞の中なるこの種情ありしを従容よいと聴しくぞ思ふく
侍る

俳家奇人談巻之下大尾

終